

長崎のジャコウネズミは江戸をみたか

安田雅俊^{1,2}¹熊本野生生物研究会, ²森林総合研究所九州支所

Did the house shrews of Nagasaki see Edo?

Masatoshi Yasuda^{1,2}¹Kumamoto Wildlife Society, ²Kyushu Research Center, Forestry and Forest Products Research Instituteキーワード: *Suncus murinus*, 外来種, 細川重賢, 毛介綺煥, 本草学, 物類品隲

摘要

肥後藩藩主であった細川重賢^{しげかた} (1721年~1785年) が編纂した図譜『毛介綺煥^{もうかいきかん}』に含まれる宝暦9年閏7月4日 (1759年8月26日) の日付が添えられた「麝香鼠」について検討した。この図は長崎産の乾燥標本に基づいて描かれたとみられるが詳細は不明であった。細川重賢と本草学者田村藍水^{らんすい}との間に深い交流があったことを考えると、『毛介綺煥』に描かれたジャコウネズミは田村藍水が1758年に長崎から江戸に持ち帰った標本コレクションの一部であった可能性がある。

I examined two drawings of the house shrew dated 26 August 1759 in a collection of pictures entitled “Moukaikikan”, made by the Lord of Kumamoto, Shigekata Hosokawa (1721-1785). The drawings appeared to be based on dry specimens collected in Nagasaki, as described in the text next to the pictures, but the details were unknown. Considering the close relationship between Shigekata Hosokawa and Ransui Tamura, a Japanese naturalist, I concluded that the specimens of the house shrews at Moukaikikan were probably from Ransui’s collection brought back to Edo from Nagasaki in 1758.

肥後藩6代藩主細川重賢^{しげかた} (1721年~1785年; 以下, 重賢と略) は本草学 (後の博物学) に造詣が深い大名のひとりである (小西 1991, 1994)。重賢が編纂した図譜『毛介綺煥^{もうかいきかん}』には九州や関東あるいは南蛮渡来の動物の写生図が数多く収録されている (西山 1988; 小西 1994)。

先に筆者 (安田 2022) は, 重賢が熊本産のヤマネ *Glirulus japonicus* (齧歯目ヤマネ科) を1762年に江戸で開催

された薬品会 (一種の博覧会) に出品したこと, その薬品会の主催者は本草学者平賀源内 (以下, 源内と略; 別名として國倫, 鳩溪^{げんない}) であったことを紹介した。また, 『毛介綺煥』には現在の水俣市において1757年1月 (宝暦6年12月) に採集されたヤマネの精細な写生図があるが (長峰ほか 2010), この『毛介綺煥』のヤマネと1762年の薬品会に出品されたヤマネとの関係についても考察した (安田 2022)。

複数の先行研究 (高島 1959; 西山 1988; 小西 1991, 1994) は『毛介綺煥』にジャコウネズミ *Suncus murinus* (真無盲腸目トガリネズミ科; 漢名麝香鼠) とされる写生図が含まれることを紹介しているが, その写生図はこれらの文献に掲載されておらず, また近年『毛介綺煥』の哺乳類を紹介した熊本野生生物研究会 (2015) にも掲載されていない。そこで本稿では, (公財) 永青文庫から許可を得てこれを掲載するとともに (図1), 各種史料によって明らかとなった関連事項を記す。

ジャコウネズミはインドから東南アジア原産の小型哺乳類で, 船舶に便乗して非意図的に日本に侵入した外来種である (本川 1988)。分子系統学的研究により, 複数の原産地から異なる経路で日本に移入されたと考えられている (Ohdachi et al. 2024)。日本での初記録は1656年の長崎とされ (磯野 2012), 江戸時代には長崎, 薩摩, 琉球が主な生息地であったが, 対馬や本州の一部地域にも分布したとされる (岸田 1924; 山崎 2011; 安田・細田 2022)。1946年前後に長崎県福江島に新たに定着した (高島 1959)。その後, 南西諸島を除き, 日本各地の個体群は激減した (本川 1988)。

まず図1について確認する。描かれた2頭とも眼球がなく四肢が伸展されていることから, 生体ではなく乾燥標本とみられる。尖った吻と裸出した大きな耳を持つ。鼻鏡は左右に二分岐しているようにみえる。背面は褐色



図1 『毛介綺煥』の麝香鼠の写生図。下の個体では左脇腹（矢印の先）に灰色の部分がある。（公財）永青文庫蔵。

で濃淡がある。下の個体は上の個体よりも体色が濃く描かれており腰の毛色はとくに濃い。その左脇腹にはやや灰色の部分がある（図1）。これは臭腺かもしれない。尾は基部が太く先に行くにつれ細くなり、全体に毛がある。以上の外見的特徴から図1の動物がジャコウネズミである可能性は十分ある。なお、全体の形状がややいびつに見えるのは乾燥にともなって変形（収縮）したためかもしれない。図1を計測して算出した尾率（参考値）は上の個体で73%、下の個体で74%であった。これらの尾率は一般的なジャコウネズミの尾率50～60%（本川 1988）よりも大きかった。図の右には「肥前長崎産方言麝香鼠雌雄」「宝曆九年閏七月四日」との説明があるものの、入手方法や大きさについては記されていない。宝曆9年閏7月4日は1759年8月26日にあたるが、この日付は入手した日または写生した日であろう。描かれた2頭は、説明文から雌雄各1頭とみられるが、どちらがオスでどちらがメスなのかはわからない。

次に宝曆9年閏7月4日の重賢の所在を確認する（表1）。暦日換算の煩雑さを減らすため本段落のみ和暦で記す。右山（1983）によれば、重賢は宝曆9年3月1日に熊本を出発し4月3日に江戸に到着した。そして翌年8月9日に江戸

を發ち熊本へ向かった。以上のことから、宝曆9年閏7月4日に重賢が参勤交代で江戸に滞在していたことは明らかである。重賢が長崎産のジャコウネズミを長崎に近い熊本ではなく江戸で入手したという事実は興味深い。

第三に江戸で開催された薬品会について確認する（表1）。源内を含む本草学者田村藍水（1718年～1776年；以下、藍水と略；通称として元雄、玄雄）の一門は江戸において1757年から1760年にかけて毎年薬品会を開催し（以下、第1回目から第4回目と表記）、その後は1762年と1764年に薬品会を開催した（以下それぞれ第5、第6回目と表記）。表1から、重賢の江戸滞在時期は田村学派が江戸で開催した薬品会の会期とよく一致することが判明した。

これらの薬品会の記録がふたつある。ひとつめは第1～3回目の薬品会の出品目録『会薬譜』である。これは原稿のみで刊行されなかった（磯野 2012）。ふたつめは『物類品隲』^{ぶつるいひんしつ}（平賀 1763）で、第5回目までの薬品会の出品物から精選した数百種に関する解説書として刊行された。著者は源内、鑑定者は藍水である。

ジャコウネズミは『物類品隲』巻之四獣類において、次のように解説されている（<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555268/1/35>；2023年7月25日確認）*1。

表1 細川重賢の本草学・哺乳類学にかかわる年表. 年月日が判明している場合は西暦に換算して月を示したが、年月のみが判明している場合は和暦（旧暦）の月を示した。月不詳の場合はその年の最後に配置した。細川藩政史研究会（1974）、磯野（2012）、安田（2022）、安田・堤（2024）を参照。

西暦	和暦(旧暦)	できごと
1718年	享保3年	田村藍水, 生誕
1721年1月	享保5年12月26日	細川重賢, 生誕
1756年	宝暦6年7月	重賢, 熊本に蕃滋園(薬園)開設. 福間元斎が朝鮮人参担当となる
1757年1月	宝暦6年12月	重賢, 熊本産のヤマネ1頭を『毛介綺煥』に描く
1757年4月	宝暦7年3月1日	重賢, 熊本を発つ
1757年5月	宝暦7年4月3日	重賢, 江戸に着く
1757年	宝暦7年7月	江戸で第1回薬品会開催
1758年	宝暦8年4月	江戸で第2回薬品会開催
1758年6月	宝暦8年5月3日	重賢, 江戸を発つ
1758年7月	宝暦8年6月4日	重賢, 熊本に着く
1758年夏(月不詳)	宝暦8年	熊本で薬物会開催
1758年秋(月不詳)	宝暦8年	藍水, 九州(長崎・熊本)に採薬旅行
1759年3月	宝暦9年3月1日	重賢, 熊本を発つ
1759年4月	宝暦9年4月3日	重賢, 江戸に着く
1759年8月	宝暦9年閏7月4日	重賢, 長崎産の麝香鼠2頭を『毛介綺煥』に描く
1759年10月	宝暦9年8月18日	江戸で第3回薬品会開催. 藍水, 麝香鼠を出品
1759年	宝暦9年11月	松岡恕庵の『結駝録』刊行
1760年9月	宝暦10年8月9日	重賢, 江戸を発つ
1760年10月	宝暦10年9月11日	重賢, 熊本に着く
1760年(月不詳)		江戸で第4回薬品会開催
1761年4月	宝暦11年3月1日	重賢, 熊本を発つ
1761年5月	宝暦11年4月5日	重賢, 江戸に着く
1762年6月	宝暦12年閏4月10日	江戸で第5回薬品会開催. 重賢, 熊本産のヤマネを出品
1762年7月	宝暦12年5月22日	重賢, 江戸を発つ
1762年8月	宝暦12年6月21日	重賢, 熊本に着く
1763年	宝暦13年7月	平賀源内, 『物類品隲』刊行
1763年9月	宝暦13年9月1日	重賢, 熊本を発つ
1763年11月	宝暦13年10月5日	重賢, 江戸に着く
1764年7月	明和元年6月	藍水の門人の福間元斎が江戸で朝鮮人参を受取る
1764年(月不詳)		江戸で第6回薬品会開催
1766年6月	明和3年5月1日	重賢, 江戸を発つ(1763年11月からここまで江戸滞在)
1766年7月	明和3年6月4日	重賢, 熊本に着く
1770年		重賢, 島津重豪に藍水を紹介. 重豪, 藍水に琉球産標本を下賜
1776年5月	安永5年3月23日	藍水, 没
1785年11月	天明5年10月26日	重賢, 没

香鼠 和名ジャコウネズミ○長崎産^{つちのとう}己卯主品中田村先生具之 其大サ三寸許^{ばかり}ニシテ香氣^{ほぼ}麝香ニ似タリ松岡先生曰長崎後藤町ニ此鼠多シ 其居處常ニ香氣アリ本邦ニテ此ヲ麝香鼠ト呼^{シヤムロ} 昔暹羅舶来ル時此鼠舟ニ付来今其種繁育セリト 是即地志ニ載スル所ノ香鼠ナリ

出品されたジャコウネズミは長崎産であったこと、それは己卯の年の薬品会すなわち源内が主催した第3回目（1759年10月8日）の薬品会であったこと、出品者は田村先生すなわち藍水であったことがわかる。ところが、『会薬譜』を確認すると、第3回目の薬品会の藍水の出品物のなかにジャコウネズミは含まれていなかった

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1181411/1/129>; 2023年7月25日確認)。その理由は不明である。未刊行の『会薬譜』と比較して、刊行された『物類品隲』の記述のほうが確からしいと、ここでは暫定的にとらえておきたい。

大きさは三寸ばかり(約9cm)とあるが、頭胴長であろうか。また、ジャコウネズミには麝香に似た匂いがあると記されている。麝香(別名ムスク)とはジャコウジカ類 *Moschus* spp. (鯨偶蹄目ジャコウジカ科) からとれる医薬品や香水の原料(薬種)で、洋の東西を問わず古くから利用されてきたが、現在はワシントン条約で国際取引が禁止・制限されている(石井 2000)。

松岡先生とは、京都の本草学者松岡恕庵(以下、恕庵

*1 『物類品隲』巻之五の「麝鼠」の図をジャコウネズミとする説(土井 2008; 松井 2020)は誤りで、安田(2022)が論じたように、『物類品隲』の「麝鼠」はヤマネを指すと考えるのが妥当である。

と略)とみられる。『物類品鑑』のジャコウネズミの解説のうち「松岡先生曰」より後の部分は怨庵の『結駝録』上巻「麝香鼠の事」(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2557162/1/11>; 2023年7月25日確認)の記述とほぼ同一である。『結駝録』3巻は怨庵の没後、1759年に刊行されたから(磯野 2012), 源内は当時最新の出版物から自身の『物類品鑑』に引用したと言える。

以上を整理すると、江戸にもちこまれた長崎産のジャコウネズミのうち、①『毛介綺煥』に描かれた2頭は1759年8月26日に江戸の重賢の手元にあり、②藍水の所有するジャコウネズミは同年10月8日に江戸で源内が主催した薬品会に出品されたという時間的な前後関係が考えられた(表1)。

筆者は、これら①と②の時間的な近接性は偶然ではなく、両者には関係があると考え。その理由として、重賢あるいは熊本藩と江戸本草学の田村学派との間で交流があったことが挙げられる(表1)。すなわち、熊本藩では藩政改革のなかで1756年に藩直営の薬園として蕃滋園ばんじえんを開設したが、そこで朝鮮人参の栽培と製法の担当を命じられた福岡元斎は藍水の門人であった(草野・藤田 1986)。1758年、藍水は九州に採薬旅行し、長崎と熊本を訪れた(上野 1989; 安田・堤 2024)。1762年、冒頭で述べたように、重賢は田村一門の源内が江戸で主催した第5回目の薬品会に熊本産のヤマネを出品した(安田 2022)。1770年、藍水は重賢から薩摩藩8代藩主島津重豪に紹介され、重豪から下賜された植物標本をもとに南西諸島の本草学を研究した(上野 1982)。

ジャコウネズミは江戸時代の多くの本草書等に収載されており、日本の本草学者たちの広く知るところであった(岸田 1924; 梶島 1997)。盛岡藩では17世紀後半に領内で捕獲された「麝香鼠」*2が薬種として献上されたという記録がある(盛岡市教育委員会 1990)。医師の橋南たちばななんけいは長崎のオランダ人がジャコウネズミから麝香を抽出する技術をもっているという噂を紹介している(岸田 1924)。

長崎から江戸へのジャコウネズミの持ち込みには本草学のネットワークが関係したらしい(安田 2023)。1758年、すなわち『毛介綺煥』のジャコウネズミ(図1)が描かれる前の年、藍水は長崎と熊本周辺を訪れ、さまざまな動植物を江戸に持ち帰った(上野 1989; 磯野 2012; 安田・堤 2024)。翌1759年の薬品会に藍水が出品したジャコウネズミはこのときの標本とみられる。『毛介綺煥』には1759年に描かれたジャコウネズミの由来は記されていないが、図1のジャコウネズミと同年の薬品会に藍水

が出品したジャコウネズミは同一のサンプルあるいはサンプルシリーズであったかもしれない。いずれにせよ、長崎のジャコウネズミは江戸をみたらしい。

謝辞

本研究は(公財)永青文庫から資料の利用許可を受けて行った(永青掲第21号)。文献調査には国立国会図書館デジタルコレクションを利用した。『盛岡藩雑書』の「麝香鼠」の記述については松村はるか氏と三浦慎悟博士から教示を得た。本稿に対して佐々木英理子主任学芸員(永青文庫)、大館智志博士(北海道大学)、川田伸一郎博士(国立科学博物館)、堤 将太氏(熊本県博物館ネットワークセンター)から有益なコメントを賜った。ここに記して謝意を示す。本研究の一部は国立研究開発法人森林研究・整備機構の経常研究として行われた。

引用文献

- 土井康弘. 2008. 本草学者 平賀源内. 講談社, 東京, 221pp.
- 平賀國倫(編). 1763. 物類品鑑. 松籟館蔵板, 江戸・大坂. <https://dl.ndl.go.jp/pid/2555265>
- 細川藩政史研究会(編). 1974. 熊本藩年表稿. 細川藩政史研究会, 熊本, 386pp.
- 石井信夫. 2000. ジャコウジカ類の保全とワシントン条約-とくに日本との関わりについて-. 比較社会文化 6: 47-57.
- 磯野直秀. 2012. 日本博物誌総合年表 [総合年表編]. 平凡社, 東京, 750pp.
- 梶島孝雄. 1997. 資料日本動物史. 八坂書房, 東京, 652+27pp.
- 岸田久吉. 1924. ジャコウネズミに就て. 動物学雑誌 36(425): 156-159.
- 小西正泰. 1991. 博物学フィーバーの先がけ-細川重賢. 殿様生物学の系譜(『科学朝日』, 編), pp. 7-18. 朝日新聞社, 東京.
- 小西正泰. 1994. 細川重賢. 彩色江戸博物学集成(下中弘, 編), pp. 89-105. 平凡社, 東京.
- 熊本野生生物研究会(編). 2015. くまもとの哺乳類. 東海大学出版部, 秦野, 303pp.
- 草野冴子・藤田覚(校訂). 1986. 田村藍水・西湖公用日記. 続群書類従完成会, 東京, 313pp.
- 松井年行. 2020. 物類品鑑の研究. 美巧社, 高松, 241pp.
- 右山幸介. 1983. 細川氏の参勤, 就封の期日について.

*2 この「麝香鼠」がジャコウネズミ *Suncus murinus* か否かは検討の余地がある。

- 熊本史学 (59): 11-36.
- 盛岡市教育委員会 (編). 1990. 盛岡藩雑書. 第4巻. 熊谷印刷出版部, 盛岡, 967pp.
- 本川雅治. 1988. 日本産ジネズミ亜科の自然史. 食虫類の自然史 (阿部 永・横畑泰志, 編), pp. 275-349. 比婆科学教育振興会, 庄原.
- 長峰 智・安田雅俊・坂田拓司. 2010. 18世紀中葉の毛介綺煥に描かれたヤマネ *Glirulus japonicus* の産地の特定. 熊本野生生物研究会誌 (6): 29-32.
- 西山松之助. 1988. 真写文化史上の細川重賢. 成城大学民俗学研究所紀要 (12): 79-139.
- Ohdachi, S. D., Fujiwara, K., Shekhar, C., Son, N. T., Suzuki, H., and Osada, N. 2024. Phylogenetics and population genetics of the Asian house shrew, *Suncus murinus*-*S. montanus* species complex, inferred from whole-genome and mitochondrial DNA sequences, with special reference to the Ryukyu Archipelago, Japan. *Zoological Science* 41(2): 216-229.
- 高島春雄. 1959. 五島列島陸棲動物相管見. 山階鳥類研究所研究報告 1(13): 522-530.
- 上野益三. 1982. 薩摩博物学. 島津出版, 東京, 317+27 pp.
- 上野益三. 1989. 諸州薬品考. 博物学の愉しみ. pp. 82-90. 八坂書房, 東京.
- 山崎 健. 2011. 日本におけるジャコウネズミの渡来と分布に関する古記録. スクスの生物学 (磯村源藏, 監), pp. 73-77. 学会出版センター, 東京.
- 安田雅俊. 2022. 熊本のヤマネは江戸をみたか. 熊本野生生物研究会誌 (11): 5-6.
- 安田雅俊. 2023. 日本哺乳類学の源流. 日本の哺乳類学百年の歩み (三浦慎悟, 監), pp. 34-46. 文英堂出版, 東京.
- 安田雅俊・細田徹治. 2022. 『紀伊続風土記』に記された哺乳類. 南紀生物 64(1): 107-112.
- 安田雅俊・堤 将太. 2024. 本草学者田村藍水はいつ長崎に滞在したか. 長崎県生物学会誌(94) (印刷中)

受付日: 2023年7月26日

受理日: 2024年5月12日

連絡先: 安田雅俊 (国研) 森林研究・整備機構森林総合研究所九州支所

〒860-0862 熊本県熊本市中央区黒髪 4-11-16

✉ myasuda@ffpri.affrc.go.jp